

自著を外国語にするということ

山 田 奨 治

学者稼業も二〇年を越えると、いくつかの著書がたまってくる。そのなかには、外国語に翻訳された幸運な本もある。自著を外国語にする経験——といっても、わたしがか解する外国語はもはや英語だけなので、「自著を英語にする経験」というべきなのだろうが——は、日本語で書くときに暗黙の前提にしていたことを気付かせてくれる経験でもあった。

自著を英語にするといっても、独力で完全な英訳ができるほどの語学力はわたしにはない。いくつかある英訳書や英語論文のほとんどは、翻訳家による労作をわたしが校閲するか、わたしの下手な英訳をネイティブに直してもらったものであることを、最初に白状しておく。とくに、*Shots in the Dark: Japan, Zen, and the West* (The University of Chicago Press and Nichibunken, 2009) はアール・ハルトマンちゃん‘*“Pirate” Publishing: The Battle over Perpetual Copyright in Eighteenth-Century Britain* (Nichibunken, 2012) はリン・リッグスさんという、得がたい優れた翻訳家が英訳し、日文研の同僚のパトリシア・フィスターさんの編集作業を経て世に出たものである。したがって、わたしにとっての著書の英訳の経験とは、これらのプロフェッショナルな方々との共同作業の経験のことでもある。

さて、わたしが日本語で書くときに暗黙の前提にしていたこととは、ひとことでいえば、日本語が読める読者ならばわたしと文化を共有する「日本人」であろうという決め付けだった。

それがどれほどよろく、馬鹿げた思い込みだったかは、少し考えたらわかることだった。

しかし、それは日本の出版社と仕事をしている限りにおいては、実用的には問題にはならない前提でもある。日本国内において日本語で出版するときには、言語だけでなく日本のある時代を生きた経験や、他の文化的なことの多くを共有する、ある程度の数の読者層を念頭に置いている。そもそも一定数の読者を見込めない本は、商業出版として成り立たない。日本語の本の主たる読者は、漠然としたいわゆる「日本人」なのである。

書く方も、当然のようにそういう「日本人」に向けて書いている。日本文化にまつわる本ならば、なおのこと「日本人」だというアイデンティティーを持った読者を意識する。ところが、それを外国語に変えようとすると、Line-to-Lineの翻訳では、「宛先の違うメッセージ」になってしまう。

たとえば、「日本人」の読者に向けた一般書では、「わたしたち」という便利なことばを、わたしは安直に使っていた。「わたしたち」とはいったい誰なのか？ この文章を書く「わたし」がいて、その「わたし」と多くの属性を共有していると思われる集団のみを、読者として暗黙裏に想定していることが、「わたしたち」の語の背景には隠れていた。

ところが、その文章を英訳しようとしたとたんに、異なる文化圏に属する読者には「わたしたち」の語が通用しないことに、はたと気が付く。仕方なく日本語の「わたしたち」の部分は、翻訳者の勧めにしたがって「We Japanese」とすることにしたが、「では「Japanese」とは誰か？」という問いには簡単には答えられない、そういう欠点を露呈させる文章になってしまふ。それも著者の当初の思慮が足りなかったことに原因がある。書き手の実力のなさを示す、正直な文章だったとも思う。

もちろん、以前にも学術論文ではそんなことばは使わなかったし、いまでは一般書を書くときにも「わたしたち」の使い方には注意している。このことばのあいまいさと政治性に気付かされたのも、著書の英訳という作業を通してだった。

日本語を母国語とし、国籍が日本人で、日本国の領土に永く暮らし、そこで教育を受けてきた著者の属性と、その著者に（この場合）欧米の学術出版社が期待するテーマには、深い関係があるように感じている。*Shots in the Dark* は、わたしが書くにはその観点で好適なテーマだった。もちろん、わたしの所属が日文研であることも、シカゴ大学のレフェリーたちの判断に影響を与えただろう。そして、わたしの所属が日文研であるがため、その創設時に欧米で流布した風評に基づく批判が、某学術誌のレビューで展開されることにもなった。それはそれで興味深い経験であったが、著者の属性にかかるフィルターが、欧米の学術界に根強いことを実感した。

もうひとつの英訳書の“*Pirate Publishing*”の場合は、前著とはかなり様相が違った。そのテーマは、一八世紀イギリスの出版史・法制史・文学史がオーバーラップする領域だった。それが現代日本の文化状況と関係があることは、同書の序文をお読みいただけたら理解できるだろう。しかし、日本学の研究機関に属する研究者が書いたイギリス史の本なので、欧米の学術マーケットで受入れられる可能性は少ないだろうと思っていた。

英語も満足に使いこなせない日本人が書いたイギリスの歴史書など、欧米の出版社は出してくれないだろう——そういう不安を友人であるアメリカ人の日本研究者にした。すると彼女は、もしそうなら日本語をきちんと使えないアメリカ人のわたしが書いた日本についての本など、日本語では出版されないでしょうねといった。そのときは、ああそれとおなじことですね

と笑っていたが、よく考えてみるとおなじではない。その理由は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』（一九四六）からアン・アリスンの『菊とボケモン』（二〇一〇、原題は『ミレニアル・モンスターズ』）まで、日本の出版界には「外国人（とくに西欧人）」による「日本文化論」というジャンルが確立しているからだ。そうした日本と欧米の出版マーケットの非対称性については、さらに考察する必要がある。

“Private Publishing”の日文研との共同出版のプロポーザルをいくつもの欧米の学術出版社に送ってみたが、予想通りよい返事はいずれに得られなかった。最終的には、紙媒体の書籍を日文研の単独で出版すると同時に、日文研初の試みとしてコピー・再配布自由のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを付けたPDFファイルを公開した。同書の電子版は、日文研のサイトに加えてGoogle BooksやScribdなどからも無料で入手できるようにした。そのほうが、紙媒体の書籍や商業ベースの電子出版よりも広く読まれることが期待できたからだ。結果、二〇一四年四月時点でScribdだけでも同書は一〇〇〇ビューを超えている。もちろん、ファイルを開いたすべてのひとびとが、全体を熟読して下さっているはずはないのだが、PDF公開の狙いは達成できたと考えている。

細かな技術論にも少し触れておこう。日本語では成立する文章でも、それを横文字にするにあたって、追加の情報が必要なことも多い。典型的なのは、人名・地名などの漢字の固有名詞の読み方である。日本語で書いているぶんには、漢字で書けば事足りるので、自分がその固有名詞の正式な読み方を知らないという事実をやり過ごしてしまう。講演でもすれば読めない名前を調べるのだろうが、書き物であれば、たとえ読めなくてもそれで済んでしまう。

日本語の文献でカタカナ表記された西洋人名を、アルファベットに戻すことも難しい。ある

程度著名な人物ならばスベルの調べもつくが、そうでなければ推測するしかない。

これは小説の日英翻訳などでよく話題になることだが、名詞が単数か複数かという点も大問題である。自著の翻訳にかかわってみて、日本語で考えるときのあいまいさと英語の厳格さが身にしてみた。たとえば、ある人物に愛人がいたと書く場合、日本語ならば「愛人がいた」で済む。ところが、英語の文法は愛人がひとりなのか、ふたり以上なのか、はっきりさせることを要求する。それを確認するには、資料をひっくり返してもう一度調べ直さないといけない。

だから、わたしが理解できない言語への翻訳については、著者のわたしはその内容の正確さを保証できない。わたしの文章のいくつかは、中国語や韓国語、イタリア語にもなっている。しかし多くの場合、その翻訳にあたって訳者から細かな問い合わせを受けていない。また国によつては出版事情により原意をそのままに訳すことができないことも承知している。これらの理由で、英語以外への翻訳のクオリティーを、著者のわたしは保証できない。

自著を外国語にする、とりわけ英語にする魅力は、何といっても数の上でも面的な広がりの上でも、日本語版をはるかに超える多様な読者を獲得できることにある。おかげで、フランスの研究機関に招かれて、自著をめぐってわたしの理解できないフランス語での議論が展開される経験をしたり、イタリア語やドイツ語によるネットへの書き込みをみかけたりするようになった。わたしが考えたことを世界のひとびとも考えてくれている。それこそが研究者という職業の愉悅である。

(国際日本文化研究センター教授)